

キョウダイ

オノマリコ

登場人物

A Bと双子

B Aと双子

A かつて私にはキョウダイがいました。あまり似てないキョウダイでした。私が母親似で、向こうが父親似でした。性格は、二人ともどちらにも似てないようでした。普通の家庭でした。特に貧乏でも金持ちでもありませんでした。休日にはたまに家族で出かけました。年に一度か二度は遊園地へ連れて行ってもらいました。遊園地ではしゃいでいると、私たちは叱られました。遊園地ではしゃいでいないと、それはそれで叱られました。ほとんどの時間、私たちは二人でいました。ほとんどいつも、一緒にいました。

B いまキョウダイがどこにいるのかはわかりません。あまり似ていなかったキョウダイです。別々に会って、気が付く人もいないでしょう。元気であつてくれればいいと思うし、そんなことを私が気にはいけないとも思います。もしかしたら死んでいるのかもしれない。だけど、やっぱり生きていそうな気がします。いま私が生きているように、どこかにいると、そう信じています。

A 幼い頃、私は相当なバカでした。小学校を卒業したら中学校へ行くということを知りませんでした。日本地図の沖縄の位置に神奈川県と書きました。日本の総理大臣は校長先生だと思っていました。そのくせ自分では人並みにかしこいと信じていたのです。もちろんキョウダイもそうでした。

A (幼少) 二分の一±二分の一は？

B (幼少) …… (笑う)

A 私は安心しました。学校では笑えばたいいのことはごまかせました。キョウダイは私とおなじようにそのことを学んでいたようです。

B (幼少) (笑っている)

A キョウダイがこうなのだから私もこれでいいのだ、二分の一たす二分の一の答えなんて、私もわからなかった、だけどいいんだ。私にはキョウダイがいて、だからいつまでたってもバカの自覚が芽生えなかったのかもしれない。私とキョウダイは本当に同じものようでした。

B 一度だけキョウダイに会いに行ったことがあります。そう遠くもない街です。キョウダイはもう引越していて、いませんでした。後になって実家に引越し通知が送られてきました。ですがもう、行こうとは思いませんでした。

A 高校に上がったくらいには、バカも少しは治ってきました。その頃、万里の長城は信州にあると思っていました。万里の長城なんて単語が出るあたりが進歩です。キョウダイとは、相変わらず同じもののように過ごしていました。

B (高校生) 今日、先生に叱られた

A (高校生) うん。このままで将来どうするんだって

B (高校生) うん。あと友だち増やせて

A (高校生) うん。そんな態度じゃダメだって

B (高校生) うん。だけど結構うまくやっているのに

A (高校生) うん。藤原に告白された

B (高校生) うん

A (高校生) 知ってるの？

B (高校生) うん。もっとはつきり言えばよかった。興味ないって

A (高校生) 知ってるの？

B (高校生) あいつ、趣味じゃないんだよ

A (高校生) 知ってるの？

B (高校生) うん

A (高校生) どうして？

B (高校生) 自分のことだよ？

A どちらの記憶がどちらのものかわからない、そういうことが起こるようになっていきました。私たちのどこまでが私なのか、キョウダイなのか、あいまいになっていました。それをこの日初めて、私は意識しました。この日のこの会話までは、ずっと気づかずに生きていました。

B キョウダイは私が恐ろしかった。親にも私にも言わなかったけれど、恐ろしかった。わかりました。キョウダイが私である以上に、私はキョウダイだったから。私たちの境目はあいまいで、だけでも少し、私のほうが押していたから。

A バカな私ですが、一念発起して大学へ行くことにしました。キョウダイは黙っていました。なるべく遠くの大学を選んで受験しました。キョウダイは黙っていました。

B 親は何度かキョウダイに会いに行きました。旅行気分で行って、帰ってきました。キョウダイは元気だったと私に告げました。前より元気だったと、告げました。

A 奇跡的に現役で一校合格して、なんとかかという大学の寮に入ることになりました。

B あれきりキョウダイには会っていません。

A 行って来ます。

B 行ってらっしゃい。

A これきりキョウダイには会っていません。

B 奇跡的に現役で一校合格して、そのなんとかかという大学の寮に入ったそうです。

A 親は何度か私の顔を見にきました。旅行みたいなものだと言いながら。私がまあ元気そうに生きているのを確認して、小さな声で私とキョウダイが離れてよかったと告げて、キョウダイのいる家へ帰っていきました。

B キョウダイが大学に行くと言い出したとき、私は黙っていました。なるべく遠くの大学ばかりを選んでしていると聞いて、やっぱりと思いました。私から、逃れたいんだと思いました。私は黙っていました。

A 私は、キョウダイが恐ろしかった。親にもキョウダイにも言えませんでした。が、恐ろしかった。私はキョウダイを飲み込んでいたし、飲み込まれてもいた。キョウダイもきつと恐れていたと思います。私たちの境目はあいまいで、私たちは安定していなかった。

B 高校に上がったくらいの頃です。キョウダイとは相変わらず同じもののように過ごしていました。

A (高校生) 今日、先生に叱られた

B (高校生) うん。このままで将来どうするんだって

A (高校生) うん。あと友だち増やせて

B (高校生) うん。そんな態度じゃダメだって

A (高校生) うん。だけど結構うまくやっているのに

B (高校生) うん。藤原に告白された

A (高校生) うん。もつとはつきり言えばよかった。興味ないって

B (高校生) うん。そうだね

A (高校生) あいつ、趣味じゃないんだよ

B (高校生) うん。そうだね

B その告白はキョウダイに起こったことではありません。ですが私はそれを言いませんでした。どちらの記憶がどちらのものかわからない、私たちはそうなっていました。もうずっと前からそうでした。このままそうなのかもしれないと私は思っていました。

A 一度だけキョウダイに会うため、予告もなしに実家に行ったことがあります。ですがその時、キョウダイはいませんでした。両親は私を歓迎してくれました。ですがもう行くことはないでしょう。

B 幼い頃、私たちはバカでした。お互いにバカだったから気づかずにすんでいました。だけど学校へ行ってクラスメイトに混じると不安を感じたのでしよう、私たちは家でよく質問を出し合いました。

A (幼少時) 二分の一と二分の一は？

B (幼少時) ……(笑う)

B 笑ってごまかすということを、この時私は覚えました。質問は、私たちのことを言っているように聞こえました。私とキョウダイは二人で一つだ、だから、二分の一と二分の一とが合わさった、私たちは一だと、一つの存在だと答えればいいのかと思います。ですが、私は二分の一でしょうか。キョウダイは二分の一なんですか。それぞれ一人の人間であるはずですが一十一が一になることはありません。そうするとやはり私たちはそれぞれでは二分の一なんでしょうか。私は混乱しました。そうして答えられなくなつて、笑いました。何も言わなくていいように、笑い続けていました。

A いまキョウダイがどこにいるのかはわかりません。あまり似ていなかったキョウダイです。別々に会つて、気が付く人もいないでしょう。元気であつてくれればいいと思うし、そんなことを私が気にしてはいけません。もしかしたら死んでいるのかもしれませんが、やっぱ生きていような気がします。いま私が生きているように、どこかにいると、そう信じています。

B かつて私にはキョウダイがいました。あまり似てないキョウダイでした。私が父親似で、向こうが母親似でした。性格は、二人ともどちらにも似てないようでした。普通の家庭でした。特に貧乏でも金持ちでもありませんでした。休日にはたまに家族で出かけました。年に一度か二度は遊園地へ連れて行ってもらいました。遊園地ではしゃいでいると、私たちは叱られました。遊園地ではしゃいでいないと、それはそれで叱られました。ほとんどの時間、私たちは二人でいました。ほとんどいつも、一緒にいました。

了